

長 道 遺 跡

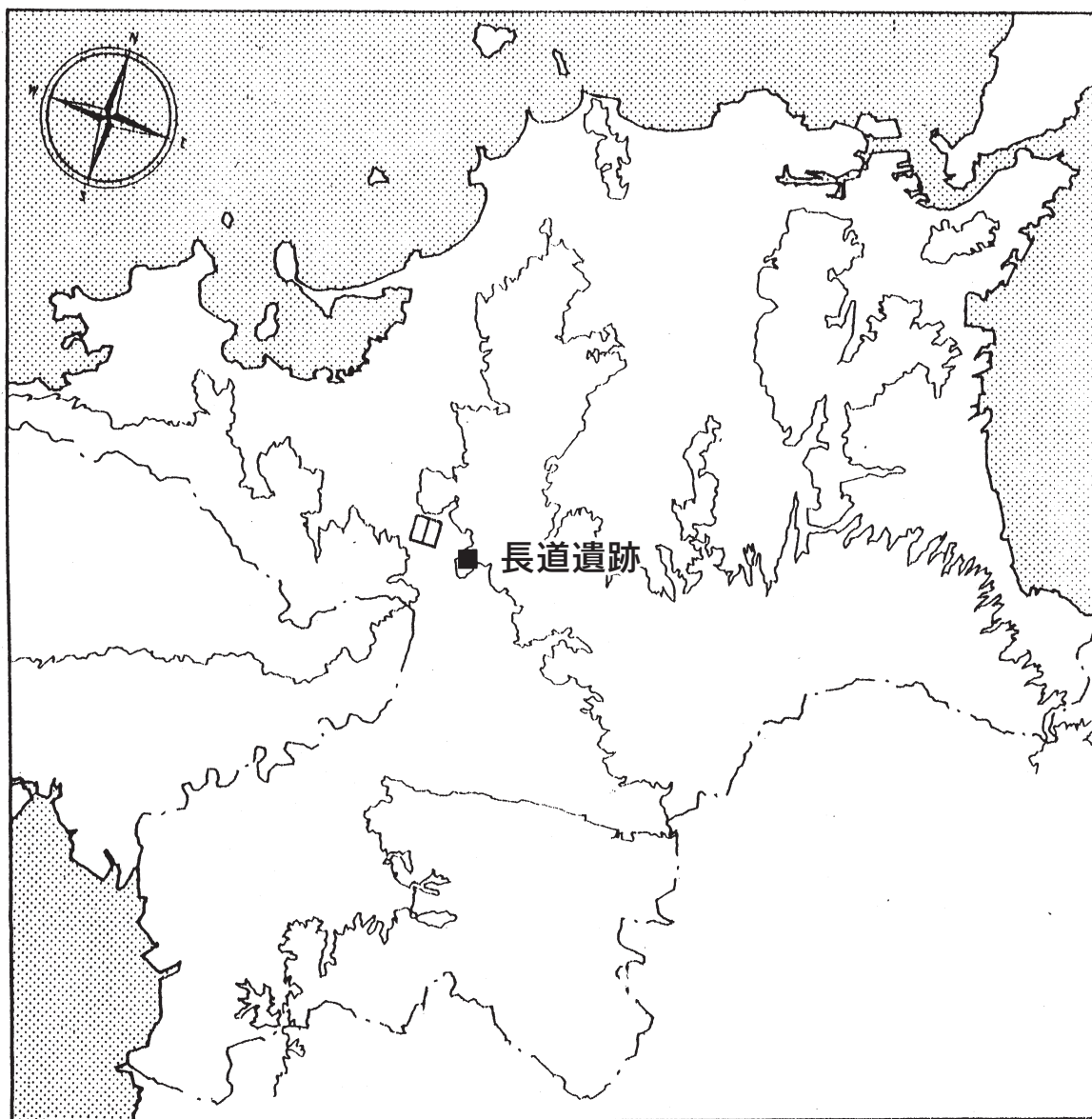
筑紫野市文化財調査報告書

第 87 集

2006

筑紫野市教育委員会

長道遺跡



例 言

1. 本書は、土取り工事に伴い筑紫野市教育委員会が発掘調査を実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 調査は平成12年度の国庫補助により筑紫野市教育委員会が実施した。
3. 調査対象地は筑紫野市大字山家4073番地32である。
4. 平成9年度の試掘調査は奥村俊久（当時社会教育課文化財担当技師）が担当し、平成12年度の試掘調査および本調査に至るまでの業務は、小鹿野亮・渡邊和子（当時文化課文化財担当技師）が行った。
5. 発掘調査は小鹿野・渡邊が行った。
6. 調査に係る遺構実測は小鹿野・渡邊が行い、基準点測量ならびに隣接地の地形測量については(株)埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
7. 遺構写真は小鹿野・渡邊が撮影し、空中写真は(有)空中写真企画に、遺物写真についてはフォトハウスOKA（当時）に委託し撮影した。
8. 遺物の挿図番号と図版番号は同一であり、遺物写真の大きさは不統一である。
9. 本書で示す土層や遺物の色については、農林水産省水産技術会・(財)日本色彩研究所監修「新版 標準土色帳」を基準とした。
10. 挿図中に使用した方位はすべて日本測地系の座標北を指し、磁北を示す場合は挿図中にM.Nを記している。
11. 報告書作成に係る製図は一部を渡邊が、他は(有)文化財テクノアシストに委託した。
12. 本書の執筆・編集は渡邊が行った。

目 次

	本 文	頁		頁
1. はじめに	2		玄室	13
2. 位置と環境	4		羨道部	13
3. 調査の内容	5		閉塞部	13
①聴音防空監視哨跡			前庭部	13
調査前の状況と調査経過	5		出土遺物	15
施設の形状・構造および規模	11		掘方	20
構築状況	11		地山整形	20
表採遺物	12		閉塞部出土遺物	21
②1号墳	12		基道	21
概要	12		墓道部土層	24
墳丘	12		出土遺物	25
主体部	12		4. まとめ	28

F i g . (挿図)

Fig.1 周辺の古墳群分布図(S=1/25,000)	1	Fig.8 古墳周辺現況測量図(S=1/200) 折込	
Fig.2 昭和52年の長道古墳周辺		Fig.9 1号墳表採遺物実測図(S=1/3)	15
地形図(S=1/2,500)	3	Fig.10 石室実測図(S=1/80)	17
Fig.3 平成11年の長道古墳周辺		Fig.11 地山整形図(S=1/100)	20
地形図(S=1/2,500) トレペ		Fig.12 閉塞部出土遺物実測図(S=1/3)	21
Fig.4 防空監視哨跡現況実測図(S=1/40)	5	Fig.13 墓道部土層実測図(S=1/40)	24
Fig.5 防空監視哨跡と石室関係図(S=1/60)	10	Fig.14 墓道出土遺物実測図(S=1/3)	25
Fig.6 盛土測量図(S=1/200)	11	Fig.15 出土鉄器実測図(S=2/3)	26
Fig.7 表採遺物実測図(S=1/3・2/3)	12		

P L . (写真図版)

PL.1 平成9年の防空監視哨跡	6	PL.8 石室	18
PL.2 平成12年の防空監視哨跡	7	PL.9 石室	19
PL.3 防空監視哨跡	8	PL.10 閉塞部	22
PL.4 防空監視哨跡	9	PL.11 羨道部	23
PL.5 1号墳	14	PL.12 出土遺物	27
PL.6 表採遺物	15		
PL.7 石室全景	16		

表—1

出土土器観察表	21
---------------	----

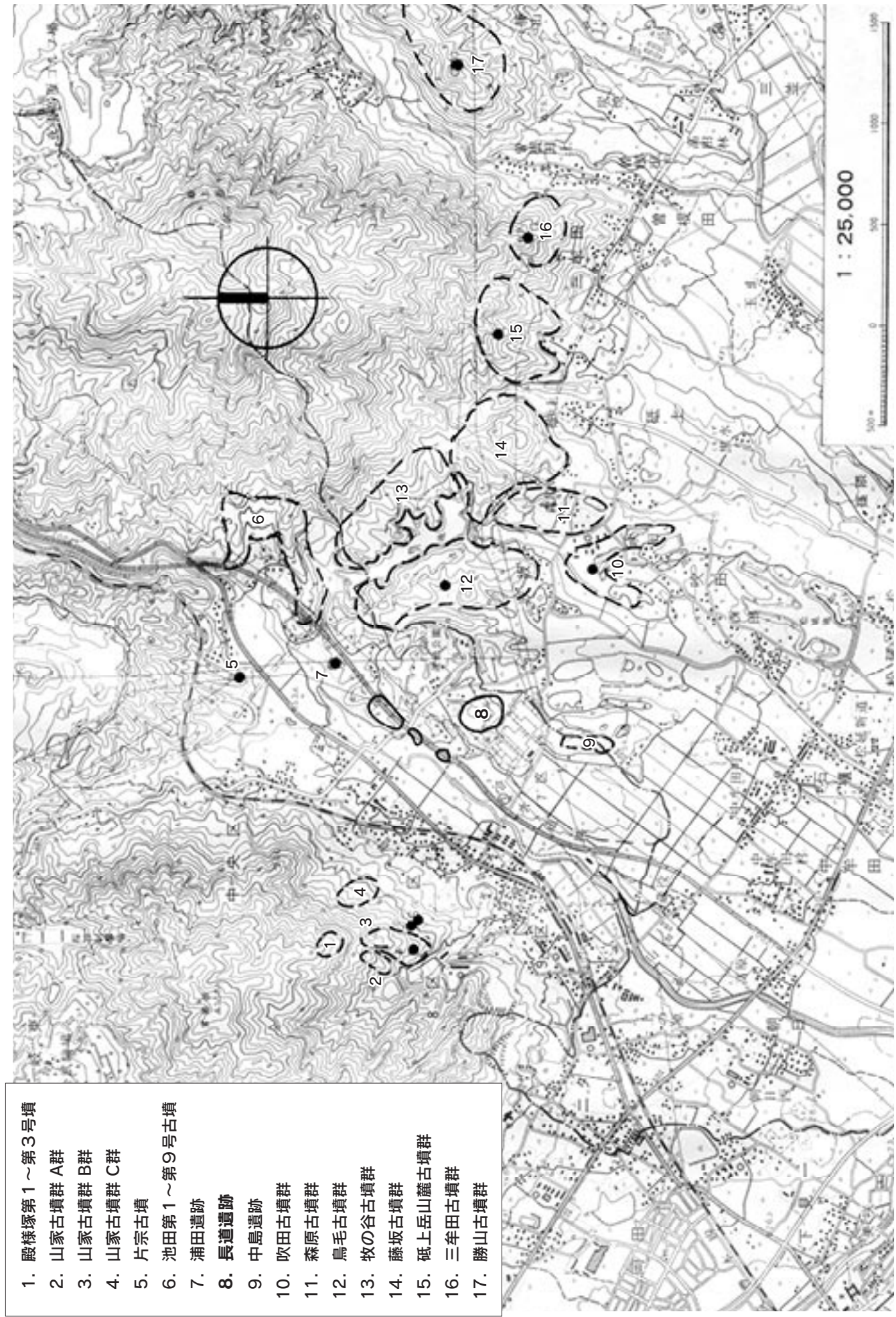


Fig.1 周辺の古墳群分布図 (S=1/25,000)

1. はじめに

平成9年6月6日付けで筑紫野市大字山家4073番地32における開発について都市計画法第32条（申請面積3,416.89㎡）の届出があった。予定地に株式会社オートリサイクルナカシマ（以下オートリサイクルナカシマ）が工場・倉庫・事務所の建築を計画したため、筑紫野市教育委員会では工事計画の内容から事前の確認調査の実施を指導した。事前の指導に基づき、オートリサイクルナカシマより「埋蔵文化財所在の有無」が同年6月16日に市教育委員会に提出され、市教育委員会では翌6月17日に試掘確認調査を実施した。この結果、開発対象地には遺跡は所在しないが開発範囲の南東部分に戦時中の聴音防空監視哨跡（以下監視哨跡）が存在していることが分かった。当該事業者の確認調査の報告とともに今回の計画では監視哨跡にも開発の影響はないとして協議完了した。

平成12年11月15日に旧地権者（上記地権者とは別）より「埋蔵文化財の有無の照会」が提出された。土取り計画は監視哨跡を含んだ範囲であったため、前回同様、事前の確認調査の実施を指導し、確認調査を11月17日に実施した。その結果、予定地内には弥生土器片が散乱する箇所があり、試掘を実施したが遺構は確認できなかった。今回の確認調査の誤算は監視哨跡の真下に所在した古墳であった。試掘調査の段階では監視哨跡の位置する丘陵頂部には確実に古墳が存在すると予測し、監視哨跡に伴う積み土は墳丘の再利用と考えて2本のトレンチを設定し積み土の層序を観察した。しかしながらトレンチ内で観察できる層序は所謂、版築の積み土とは考えられず、古墳の所在を否定する結果となった。このため監視哨跡の記録保存に伴う調査期間を旧地権者と協議し、記録作成を2日間の予定で実施することとした。

しかし監視哨跡の記録作成完了後、やはり監視哨跡の下に古墳の石室が存在する事が判明したため、再度地権者と古墳の保存について協議をやり直したが、この時点で土地所有権が移譲になっていたため古墳調査に対する責任が不明確となり、本調査の交渉も進まず、また土取り業者との日程協議も進展しなかった。現状では古墳の記録保存もできないまま破壊されると予想されるため急遽県教育事務所と古墳の調査の対応を相談し、補助金の追加申請で本調査を実施する事としたが、やはり新旧地権者ならびに土取り業者の各々の責任は明確にないままであった。

最終的には新地権者（オートリサイクルナカシマ）・土取り業者・文化財担当と発掘調査の期間について協議を重ねた結果、新地権者から文化財保護法第57条の2第1項（現第93条の第1項）の届出が提出され、期間の延長は土取り業者から承諾をうけた。市教育委員会は直ちに福岡県教育委員会に進達し、同年11月10日付けで県教育委員会より発掘調査を実施する旨の通知がなされた。これを受けて具体的な発掘調査に係る協議を進めた結果、平成12年11月10日～平成13年1月15日までに発掘調査を実施し完了させる方向で合意に至った。

なお平成13年1月16日から3月31日までに出土品の洗浄・復元ならびに図面等の整理を実施し、平成13年度中に補助金対象の業務を完了した。なお開発対象地の面積は199㎡であるが、古墳の検出された面積192㎡を調査対象地とした。また調査期間中、新地権者を古墳に案内し、発掘調査の成果を報告すると文化財保護に対し理解を示され、埋め戻したまま保存する承諾を戴いた。しかしその後、私自身の対応のまずさで新地権者の御好意を無駄にってしまった事は、私の大きな反省点でもある。

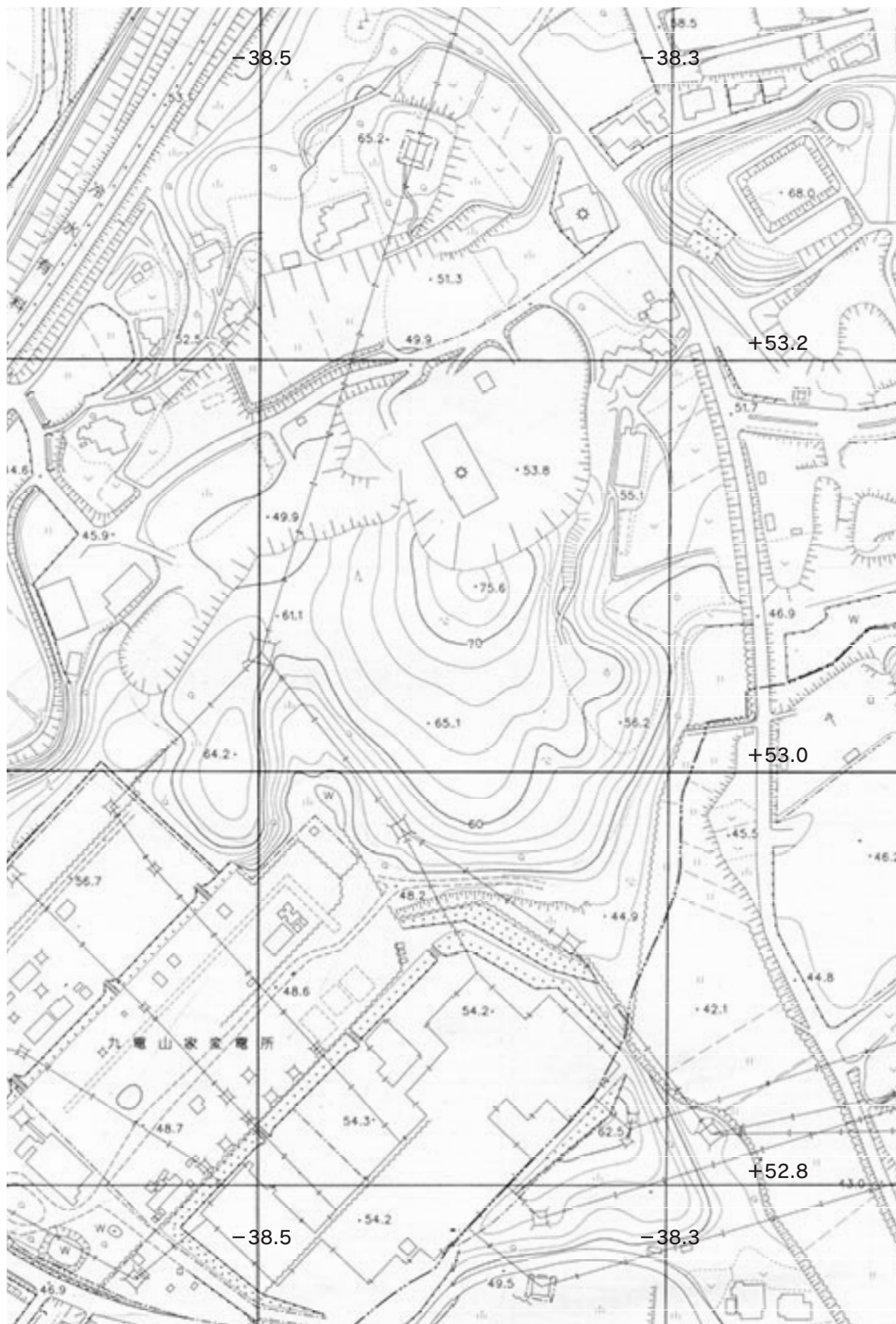


Fig.3 平成11年の長道古墳周辺地形図 (S=1/2,500)

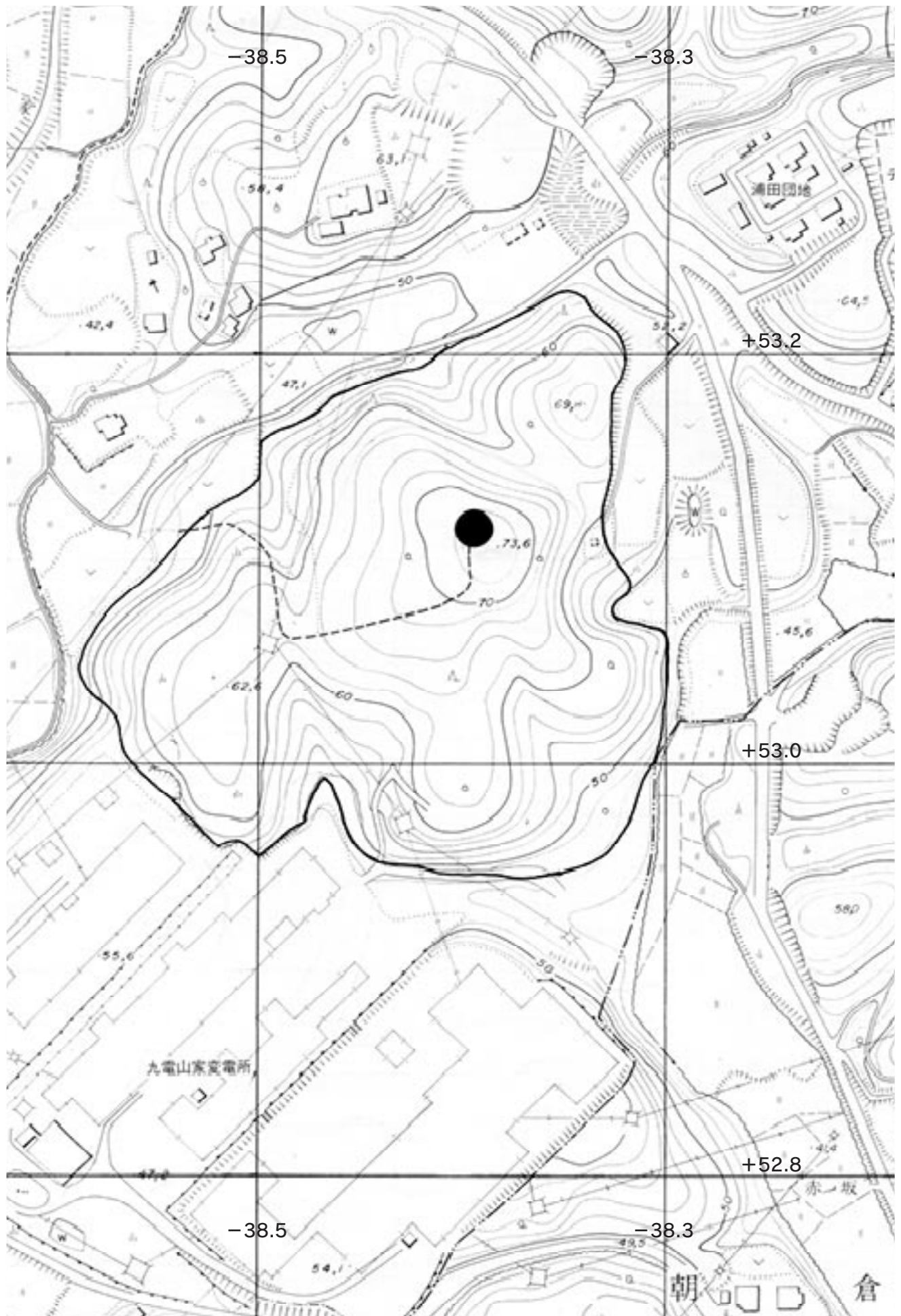


Fig.2 昭和52年の長道古墳周辺地形図 (S=1/2,500)

2. 位置と環境

長道遺跡は筑紫野市大字山家4073番地32に所在する。遺跡は筑紫野市の東南部にあって朝倉郡筑前町（旧朝倉郡夜須町、以下「旧夜須町」）との行政境付近に位置して東側は三郡山系より派生した山々が連なる。その中に筑豊地域との境をなす砥上岳（標高496.5m）があり、遺跡はこの南西山麓部に位置する。砥上岳の筑前町側山麓部には赤坂古墳群・中島古墳群・吹田古墳群・牧の谷古墳群・森原古墳群・砥上古墳群・惣利古墳群（Fig.1）など多くの古墳群が所在している。

筑紫野市側のこの周辺部の遺跡の把握状況は悪く、昭和45年頃実施された文化庁による分布調査でも時間不足と調査費用不足のために周辺域が網羅されていない状況下であり、やもすると知らず知らずの内に遺跡が消滅しているケースも多々ある。唯一把握されているのは砥上岳山麓の西端の池田古墳群だけで、長道古墳も今までは知られていない状況下にあった。また開発の計画があがり初めて確認踏査を実施するケースが多く、文化財保護行政の立ち遅れを痛感する地域でもある。

しかし筑前町（旧夜須町）側では昭和58年頃から実施された道路改良工事に伴い分布調査が実施されて、多くの古墳群が周知の遺跡として確認され筑紫野市側よりは若干網羅されていて、発掘調査の実施された遺跡も多く、吹田古墳群・砥上古墳群・森原・藤坂古墳群・赤坂古墳群などが報告されている。長道遺跡周辺部の古墳群を概観すると筑紫野市域では長道古墳の北側に池田古墳群が所在する。この古墳群の調査は冷水バイパス建設に伴い1基（8号墳）だけが発掘調査されている。他についての詳細は不明であるが長道古墳より新しい時期であろう。また南側に所在する九州電力の山家変電所付近は、長道遺跡から続く丘陵上に位置するが変電所建設は古く、遺跡等の所在の詳細は分かっていない。さらにその南側の平野部を望む低丘陵部には中島古墳群2基が所在していたが、その中の1基の前方後円墳は平成15年度に開発計画に伴う申請を受け確認調査を継続中に破壊され、詳細を確認できず残念な結果に終わってしまった。破壊されなければ長道古墳周辺の古墳の推移を考える上で重要な資料になったと思われる。

市域内の調査例は皆無なので、ここでは筑前町側の古墳群で調査されたものを中心に概観すると筑前町（旧夜須町）側の砥上岳山麓部から平野部へと移行する周辺部には古墳時代中期後半から後期初めの古墳が多くある。そのなかでも吹田古墳群は7基の古墳群でそのうちの4基が調査されている。4基はいずれも羨道部が未発達の前円式石室が内部主体で、石室形態から見れば6世紀前半代の築造と考えられ、長道1号墳の築造時期とほぼ同じと考えられる。この時期頃から墓域が山麓部へと進出するのか多くの古墳群が形成されている。構造的な系譜の異なる古墳として藤坂Ⅰ-1号墳が上げられる。これらは石室の幅が極めて狭く、羨道が玄門部にとりついて、玄門部が羨道側に張り出さないタイプである。また周辺域には筑紫野市側の山家に殿様塚1号墳、筑前町側に仙道古墳・砥上観音塚古墳などの彩色古墳もあり、彩色古墳の系譜も興味を示される所でもある。

両市町の山麓は開発の手がのびていない為に確認された古墳は少ないが、尾根筋には古墳が点在する可能性はある。多くの古墳は径10～15m程度の円墳で、それらは盗掘を受けて開口しているものと思われる。また調査の完了した藤坂Ⅱ-1号墳のように斜面上にあるために封土が流出して埋没し、一見ではそれとわからない古墳も存在するものと思われ、その数は相当数に上るものと推測される。特に筑紫野市側は砥上岳山麓古墳群のみならず、早急に山家地区全体の遺跡の実態を把握することが望まれる。

3. 調査の内容

①聴音防空監視哨跡（以下監視哨跡）

調査前の状況と調査経過 監視哨跡の周辺現況は山林で、調査前の監視哨跡は平成9年時の掘削により一部が破壊され、レンガ積み施設が部分的に確認できる状況にあった。昭和52年（Fig. 2）当時の旧地形では監視哨の中心が尾根の最高所にあたる。Fig. 6で示すように監視哨本体は径15mの範囲に高さ2mに及ぶ土を積み上げて盛土とし、一見古墳に見えた。また監視哨への登り口では調査対象外とした標高68m前後に平坦な部分が存在し、ここに簡易な建物等が建っていた事が想定されるが伐採の際にかなり地形が崩されて建造物の基礎を把握する事はできなかった。監視哨本体は尾根の頂部に存在している事や周辺の古墳群の有り方などから古墳の盛土を利用して監視哨が構築されていると推測し、盛土にトレンチを設定し土層の確認を実施したが、盛土の版築状況は確認できなかった。トレンチは高さ2mになり危険なため古墳の確認を諦め、監視哨跡及び盛土についての図面作成を行った。調査終了日に床面の厚みや構造並びに配水管の向きを確認するために床を剥がした所、古墳の石積みを確認されたため古墳本調査へと対応を移行した。

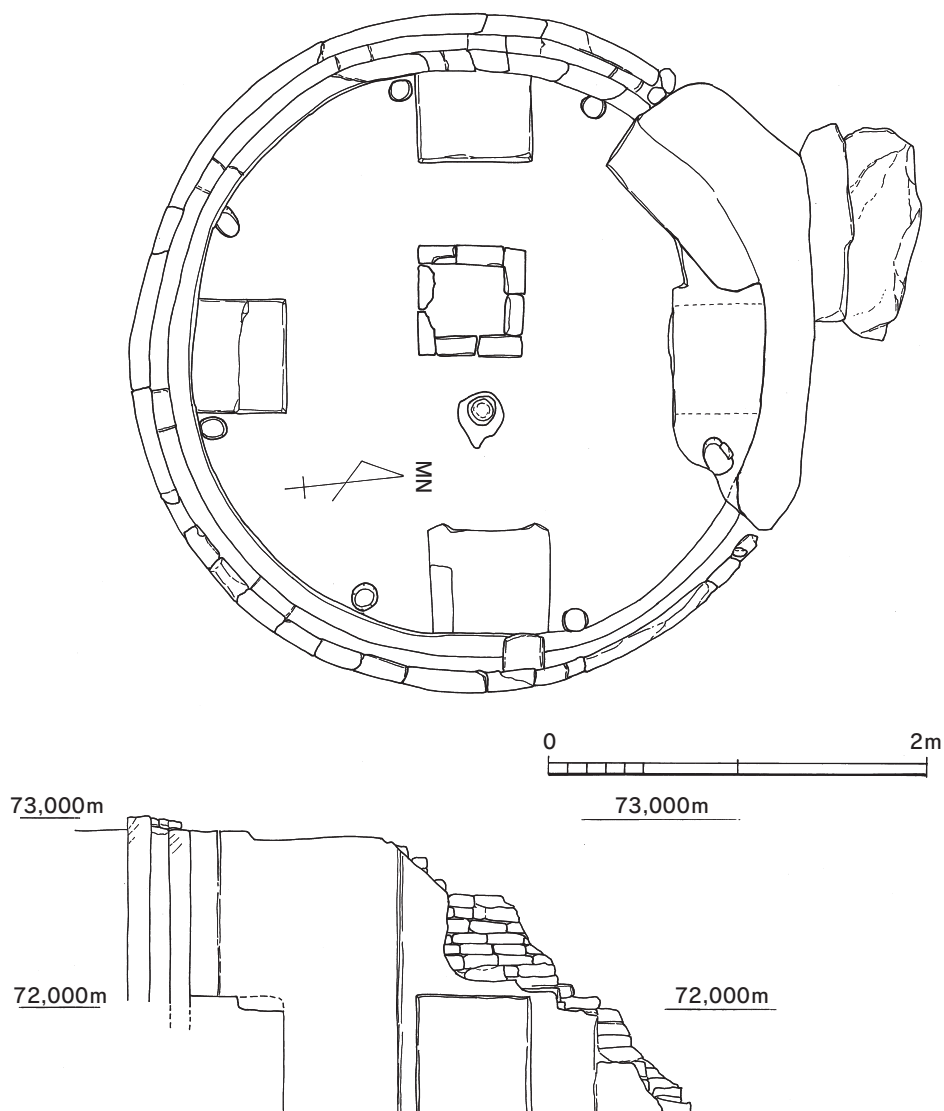


Fig.4 防空監視哨跡現況実測図 (S=1/40)

PL.1 平成9年の防空監視哨跡



遠景



西から



東南から



近景



調査前（東南から）



近景



調査後

PL.3 防空監視哨跡



西側壁



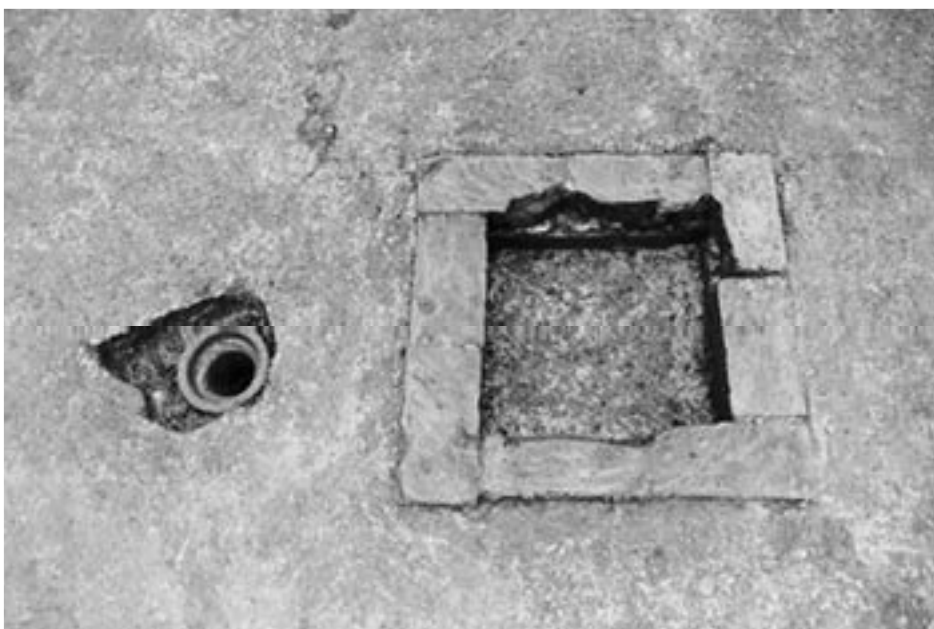
西側壁



南側段



東側壁



炉跡と排水孔

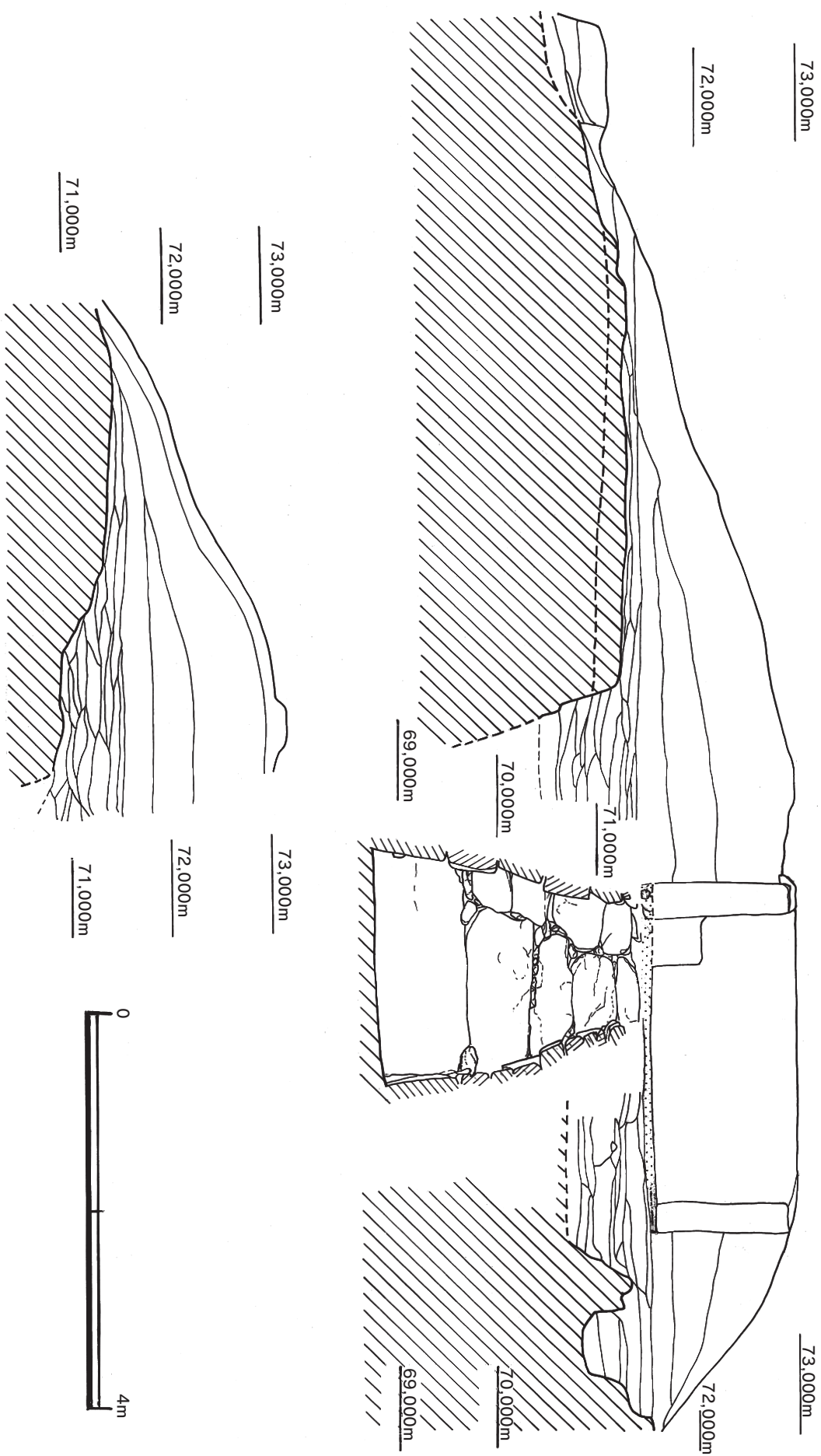


Fig.5 防空監視哨跡と石室関係図 (S=1/60)

施設の形状・構造および規模 (Fig.5) レンガを積み上げ、モルタル仕上げされた円筒状の形状を呈している。外法径3.62m、内法径3.2m、高さ1.5mを測る。レンガは長さ0.22m、幅0.1m前後のものを使用し、内側と外側には8cm程の隙間を空けて二重に積み上げた構造をなす。レンガの積み方は空間積みと呼ばれているものである。レンガの最上面部にはセメントで断面三角形の縁取りを施して空間を防いでいる。調査時にはこの縁取りは施設上部より外れて監視哨跡周辺に散乱していた。この縁取りに使用されたセメントは砂を多量に含んだ非常に質の悪いものである。

同様な縁取りを持つ施設は、「群馬県勢多郡東村^{あづま}」で指定文化財として保存されている聴音防空監視哨跡がある。ここの円筒状の施設構造は長道のものとまったく同様である。

床面の壁側には径0.1~0.15mのピットが8ヶ所確認された。これらは全国的に遺存する防空監視哨施設では上部の屋根を支える柱穴と考えられている事から、同様なものと思われる。

また壁面に沿って4方向にレンガ積みでセメント仕上げの寸づまりの長方形の段が設けられている。この長方形の段の法量は内壁に平行する長軸が0.6~0.65m、短軸は0.44~0.54m、高さ0.6mを測るものである。この長方形の段は座標軸の東西南北に位置している。同様な施設を調査した御崎谷遺跡・大床遺跡^{みさきだに おおとこ}（島根県教育委員会刊行）では、座標軸の北西・北東・南西・南東に設置されていて、方角を示す可能性を示唆されている。今回の調査でもほぼ座標軸に一致する事を考えれば方角を示し、なお且つ施設内への上り下りの足場としても用いられていたと考えられる。

また床面には中央よりやや西によった所に0.6×0.55mレンガ囲みの炉跡を設置している。炉跡は、使用されたのが短期間だったのか比熱状況はあまり強くなく、炭などの炭化物も出土しなかった。その東側0.2mに径0.16mの土管の水口がある。土管は深さ0.1m程でL字形に曲がり東側斜面まで続き、この水口から土管の最後尾までは長さ7.5mを測る。この土管の性格は、これまで調査された事例では排水孔か通信用配線孔の機能を併せもったものと考えられているが、長道遺跡では土管の最後尾が西側には伸びず、斜面になる東側にある事から排水孔と考えたい。

構築状況 (Fig.5・6) レンガ積み施設は、盛土によって一見古墳状の高まりを見せて綺麗に隠されている。盛土の現状の径は12m、高さ1.6m前後を測る。構築された位置はFig.2・3で分かるように丘陵の頂部にあたる。この頂部表土を1.5mほど削平し、径3.6mの範囲にバラスを10cmの厚さに敷いて床の基礎としてレンガを積み上げ壁を構築している。また土管の埋め込まれたレベルや基礎工程のレベルから考慮す

ると土管の配置は床づくりの工程とほぼ同時に配したと思われる。積み土はFig.5に示す様に施設が完成した後に一気に積まれている。施設の周囲を積み土により高さ0.2m、幅0.2m前後の堰堤を巡らす。

施設構築のために丘陵頂部全体を削平するのは無駄な労力ではなかったのかと工程に疑問が残る。他の類似施設で

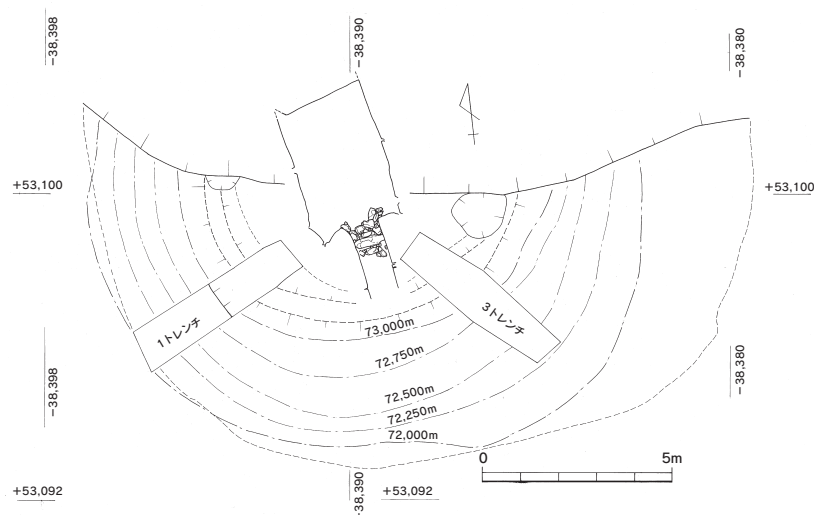


Fig.6 盛土測量図 (S=1/200)

も施設相当の大きさの孔を掘削して周辺に盛土したケースが多い。あくまで推定の域はでないが、ここでは設置箇所にも古墳が存在していた事で、工程を変更した可能性が考えられる。

表採遺物 (Fig.7) 監視哨跡周辺で採集した。1は弥生終末の甕の口縁部付近で焼成は良い。2、弥生時代後期初葉の甕の口縁部付近で口縁部直下に一条の突帯が巡る。焼成は普通。3は現存長6cm厚さ6cmを測る。断面は不整な円を呈し、周辺には所々に凹みと一部に滑らかな部分が見られる安山岩製の磨石の機能をもった敲石である。4はやや風化の進んだサヌカイト製の石鏃。形状は三角形を呈し、基部に抉りはなく自然面を残し、表裏面ともに第1工程時の剥離面を残す。5、先端部が欠損し、基部には原材の自然面が残る。素材の形状を生かし製品としたサヌカイト製のポイントである。

② 1号墳

概要 監視哨跡の項で述べたように監視哨跡の構築のために、古墳本体の盛土は削平されて、高さ0.2m程しか残っていない。調査日数が十分とれないため監視哨に伴う積み土は重機を使用して剥土を行った。石室・羨道・墓道の現状は盗掘により内部は荒らされている。また石室内の埋土から監視哨構築時には完全な石室が遺存していた可能性は高い。この周辺ではあまり確認されない石室の構築法のため、石材の抜き取りもなく遺存状況は良かったと思われる。

墳丘 (Fig.6・8) 古墳は丘陵の最頂部に構築されているが、監視哨の項で述べたように丘陵北側部分と墳丘頂部は開発により削平されている。南側は九州電力の敷地であり、全て観察できない。九州電力の敷地内を含めて地形変換線を追っていくと前方後円墳であった可能性も考えられるが、現状では確定はできない。墳丘の最大高を推測すると監視哨跡の最上部が墳丘の上部と一致すると推測される。

監視哨や現存する墳丘（高さ0.2m前後）から墳丘の築成を推測すると、丘陵頂部を平坦に削平する基礎地業を行う。この基礎地業は標高71.3mが整形ラインとなる。この整形ラインの設定は、天井石の上部に1.5m前後の盛土で掘削前の地山に相当するという土量計算に基づいているのかも知れない。

主体部 (Fig.10) 石室の構築はまず全体の腰石を大枠設置し裏込めや埋土で安定させる。埋土は版築で硬く締まっている。次に二石目を積み上げる。この二石目のレベルを羨道部天井の高さと設定して羨道部を構築する。天井石の隙間は小石や粘土で丁寧に塞いで版築で埋土を締めている。羨道部天井石が設置された後に玄室の石を積み上げていった工程が想定される。

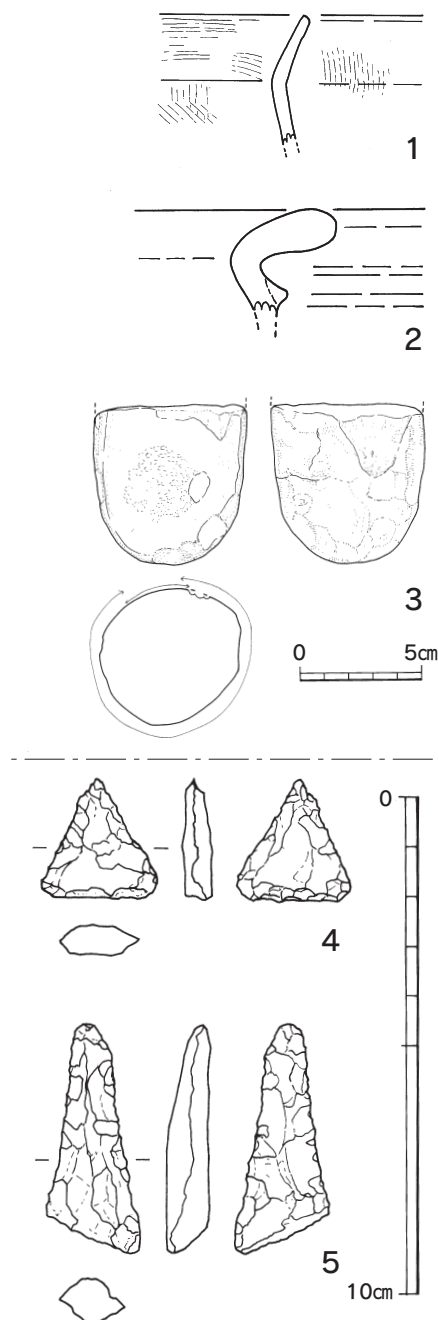


Fig.7 表採遺物実測図 (S=1/3・2/3)

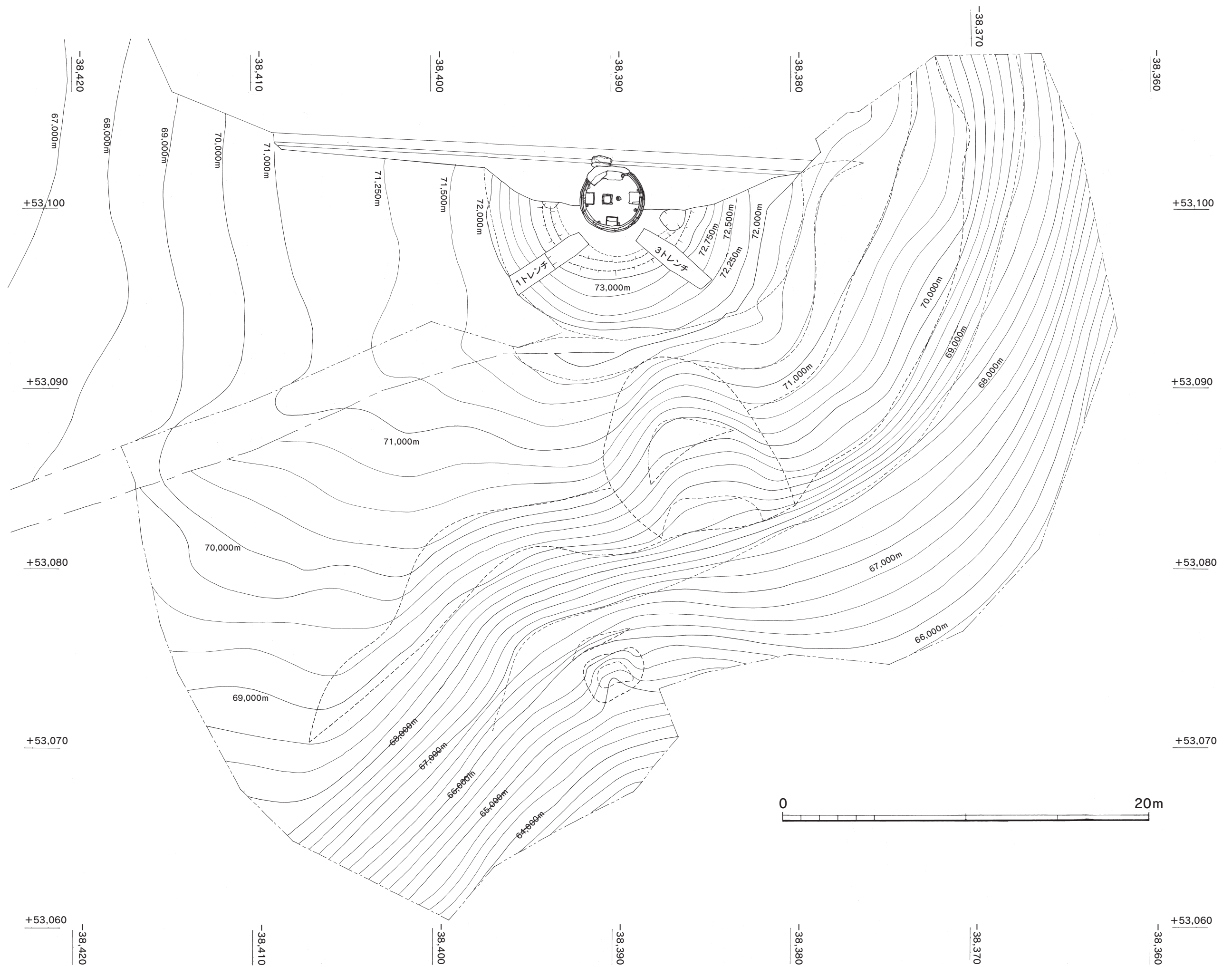


Fig.8 古墳周辺現況測量図 (S= 1/200)

全長9.2mの単室両袖の横穴式石室である。主軸をN-18°-Wにとる。玄室の天井石は残っていないが、天井部に近い壁面まで比較的良く残っている。玄室内には監視哨を構築した際に落とし込まれた玄室壁面の石材と裏込めの土がかなり堆積していた。しかし落とされた石材は、監視哨にとって邪魔なものだけで玄室内にはかなりの空間があった。石室の石材は砥上岳周辺でとれる花崗岩を使用している。石材の風化は著しく、しかも脆くなっている。

玄室 奥壁幅2.33m、前壁幅2.32m、玄室全長3.3～3.48mの平面長方形プランを呈し、玄門幅は非常に狭く0.77m前後で高さは1.2mを測る。玄門から羨道部へ0.5mの位置に幅0.23m、長さ0.79mの框石がある。この框石の前後には敷石が残る。この事からも床面には敷石が存在していた事を窺わせる。また監視哨構築時には敷石上に遺物がかなり遺存していた可能性も考えられる。

遺物が存在したために石室内の敷石は全て撤去され、その下まで荒らされ、凹凸の著しい地山が残ったと考えられる。奥壁側の石材には比較的大きな石が使用され、隙間は小石や黄褐色粘土で充填されていて安定している。左右の側壁石材は腰石だけに大きな石を使用するが、全体に比較的小振りの石材が多い。特に右側壁は大きな石材が少なく、小振りの石が多く使用され、石の配列も規則的ではない。しかもこれらの石材は風化が著しいために極めて脆くなっている。隙間の充填には小石が用いられるが、充填は雑な感じが強い。壁は持ち送りされているが、石材に小振りの石が多いため非常に不安定な感じがする。目地に使用された粘土も少ない。左側壁は右側壁に比べるとやや整った大きさの石材を用い平積みされている。隙間にはやはり小振りの石を積むが、右壁面に比べると大きな石材が多くなったためやや安定感がある。このように左右壁面は非常に対照的である。

羨道部 玄門の高さ1.2m、幅0.77m前後のままで狭い羨道部が羨門へと4.5m続き、それから短いハの字に開く石積みを最後に墓道へと変わる。玄門寄りの羨道右側壁腰石にはやや大きめの石材を使用し、隙間には小振りの石を規則的に積み上げている。安定感はあるが石材の風化も著しく脆さを感じる。玄門寄りの羨道左側壁はおおきな石を腰石とし、二石目に1.4×0.54mの平石を積んでいて安定感はある。しかしその他の腰石には小振りの石材を使用し、二石目にやや大きめの平石を積んでいるため不安定な感じがする。羨道壁面も玄室壁面と同様に左右壁面は対照的である。このように不安定な羨道壁面に対し、大きな四石の石材を使用し天井石とする。玄門寄りの天井石は2.43×1.44m、厚さ0.46mを測る平石で、ほかの三石の天井石にも2.15×1.1m前後の石を用いている。天井石と天井石の間には小石や黄褐色粘土を詰めて隙間を充填している。この隙間の充填作業は丁寧になされている。羨道側の敷石は現状では框石付近に20×30cmの扁平な石と20×10cm程度の敷石が残る。しかしこの敷石が羨門部まで敷き詰められていたかは不明である。羨道部の調査については完全に掘りきっていない。でき得る範囲の掘削に留めて図面を作成した。

閉塞 羨門を閉塞する閉塞石は左側壁側に僅かに残るだけで盗掘をうけている。このことから羨道部からも盗掘があった事が予測される。閉塞石に使用された石は小振りの割石である。閉塞部の周辺からは数点の遺物が検出されたが完全なものはない。

前庭部 羨門から90cmの長さでハの字状に開く。この石積みの石材にも小振りの石が多く使用されていて、しかも不規則で雑に積まれ、やはり安定感に欠ける。これらの石材も風化が著しく、非常に脆くなっている。



調査前



奥側壁

出土遺物 石室内や羨道部からの出土はなく、全てが隣地境の墳丘付近のものである。

6は須恵器無頸壺の胴部片、胴部中位に最大径を持つ。最大径21.2cmを測る。外面胴部上位に三条の沈線があり、自然釉がかかる。胴部下位はヘラケズリで仕上げる。7、須恵器壺の胴部片で下位はヘラケズリが施される。6・7ともに焼成は良好。8は高坏口縁部片で外面はかなり磨耗しているが内面にうっすらとミガキが残る。復元口径31.6cmを測る。口縁部が外方に開く。9は土師器高坏の脚部。脚部自体は短い。調整は磨耗が著しく内外ともに不明瞭である。10は壺で口縁は複合口縁となる。頸部に低い凸帯が一条巡る。復元口径19.9cm、外面はハケ目で仕上げ。内面は磨耗のため調整は不明瞭。11は土師器の甕の胴部。内外面ともに磨耗しているが、外面はタタキの後ハケ目で仕上げる。胴部下位には煤が付着している。内面はヘラケズリにて仕上げています。

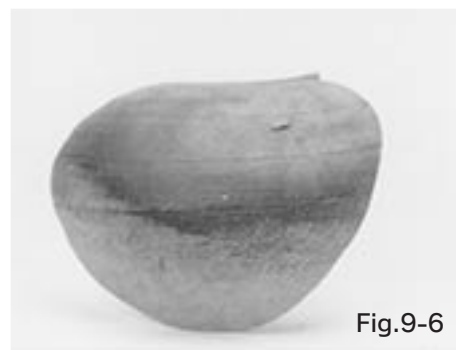


Fig.9-6



Fig.9-10

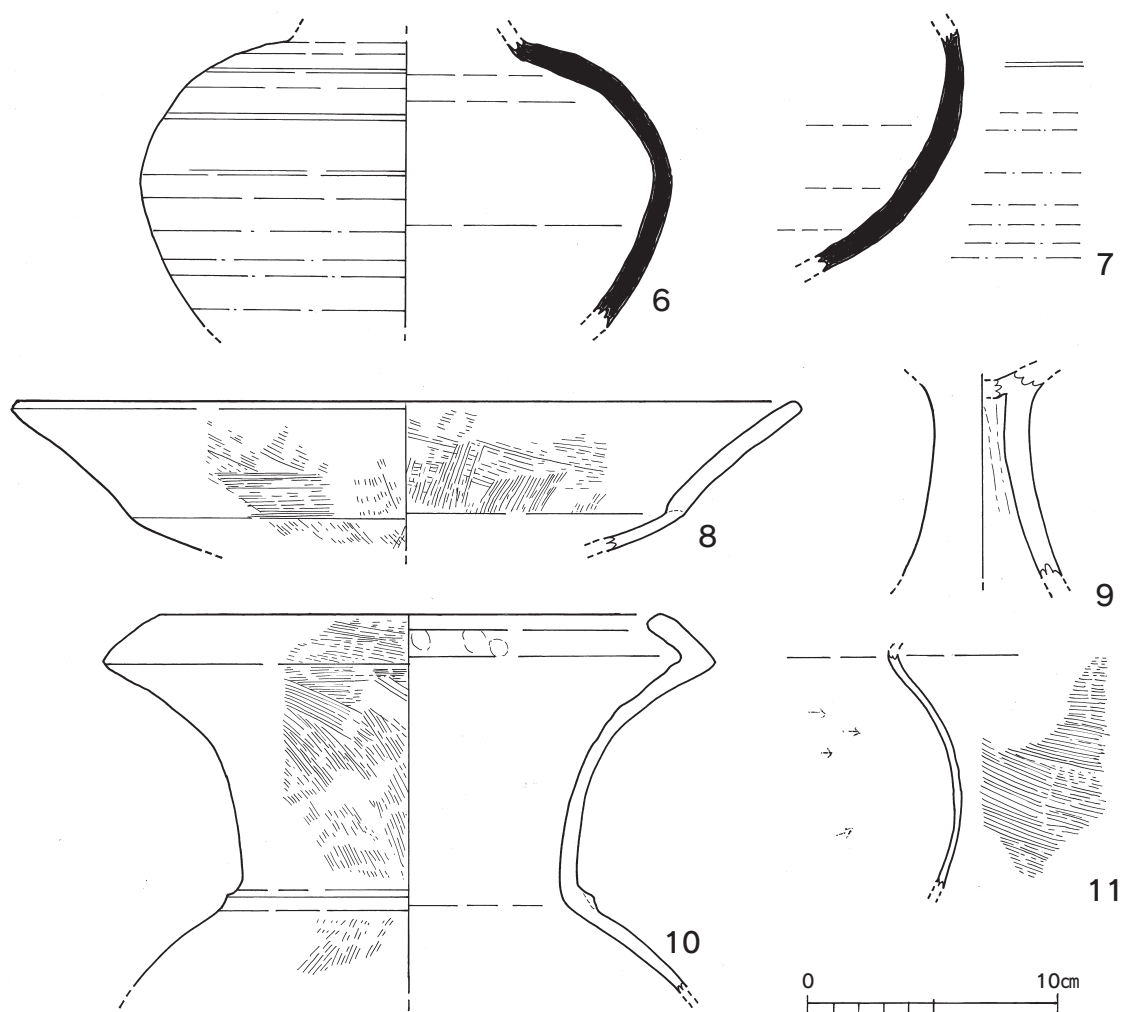


Fig.9 1号墳表採遺物実測図 (S=1/3)

PL.7 石室全景



西から



西から（近景）



真上より

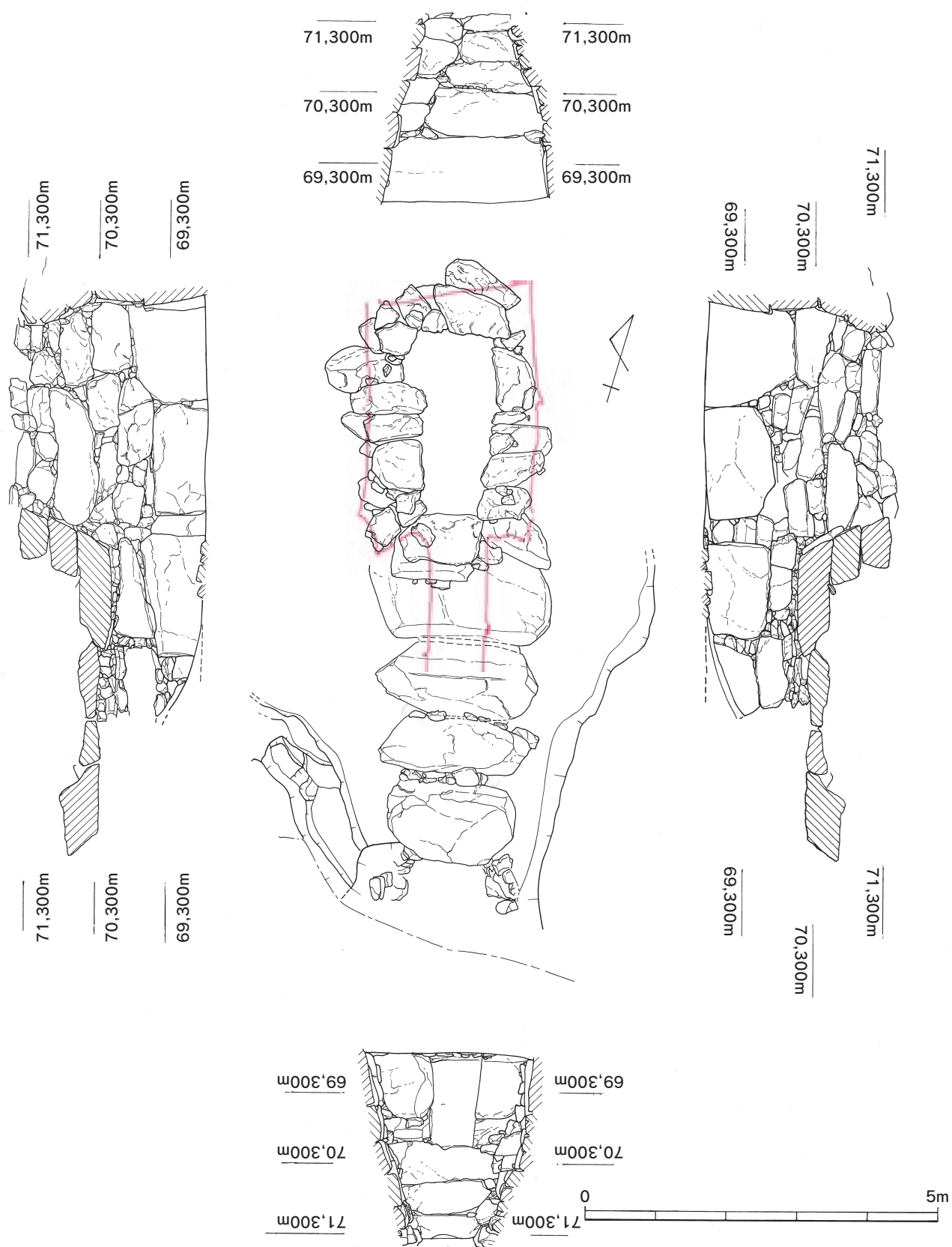
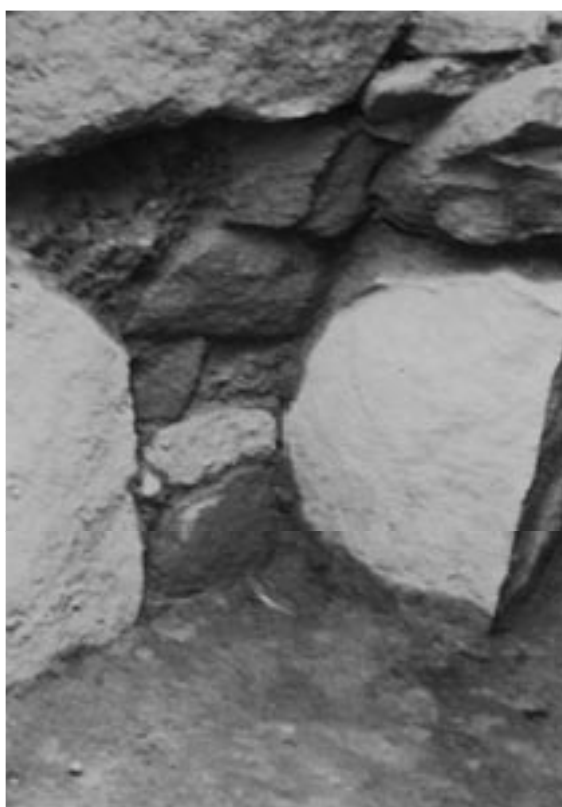


Fig.10 石室実則図 (S=1/80)



玄室から羨道部方向



右袖石



左袖石



框石（石室内より）



羨道部天井

掘方 (Fig.11) 石室掘方の平面プランは張り出しを持つ不整な形状を呈する。掘方の北側は推測の範囲をでないが玄室奥壁に沿う形であろう。玄室東側の掘方から推測しても広くはないと思われる。玄室東側掘方は側壁に沿って直線的に掘られているが、玄室と羨道の境では掘方は急に内側に向きを変えて、羨道側壁に沿って狭くなる。西側の玄室掘方は東側と同様に側壁に沿い掘削される。しかし西側羨道部付近の掘方が東側と異なる点は羨道部境から掘方が西側に拡がりを見せ掘削されている事である。この拡がった掘方から石室の石材が搬入されたものと考えられる。しかもこの掘方は石材の搬入を容易にするために緩やかなスロープを形成している。西側のこの部分を拡げる事により東側掘方の広さは深さを増す毎に狭くなっていき、石積み作業が行えるだけの最小範囲を掘削し掘方とする。この掘方にも計算された無駄のない効率性を感じさせる。掘方の深さは現状でも2.5mを測る。ただ腰石の最下部までを考えると本来の掘方の深さは3m前後が考えられる。

地山整形 (Fig.11) 地山整形の第1段階は丘陵最頂部の地表面を標高71.3mの高さに削平し、平坦面に整形を行う事を基礎地業としている。平坦面高さの設定は天井石の上部に1.5m前後の盛土を積む事で掘削前の地形と同じ高さに相当するとの土量計算がなされた可能性はある。次に整形範囲は旧地形最頂部のやや東側に偏った範囲を意識し設定されている。現状では玄室中心より西側に7.2m、東側は5.4m前後を測る。奥壁側は削平されて推測の範疇をでないが、東側と同程度の範囲であったと思われる。この偏りは次の工程である掘方の形状が大きく影響していて、ここにも築造すべてにおける計算が充分になされた技術力の高さ窺う事ができる。

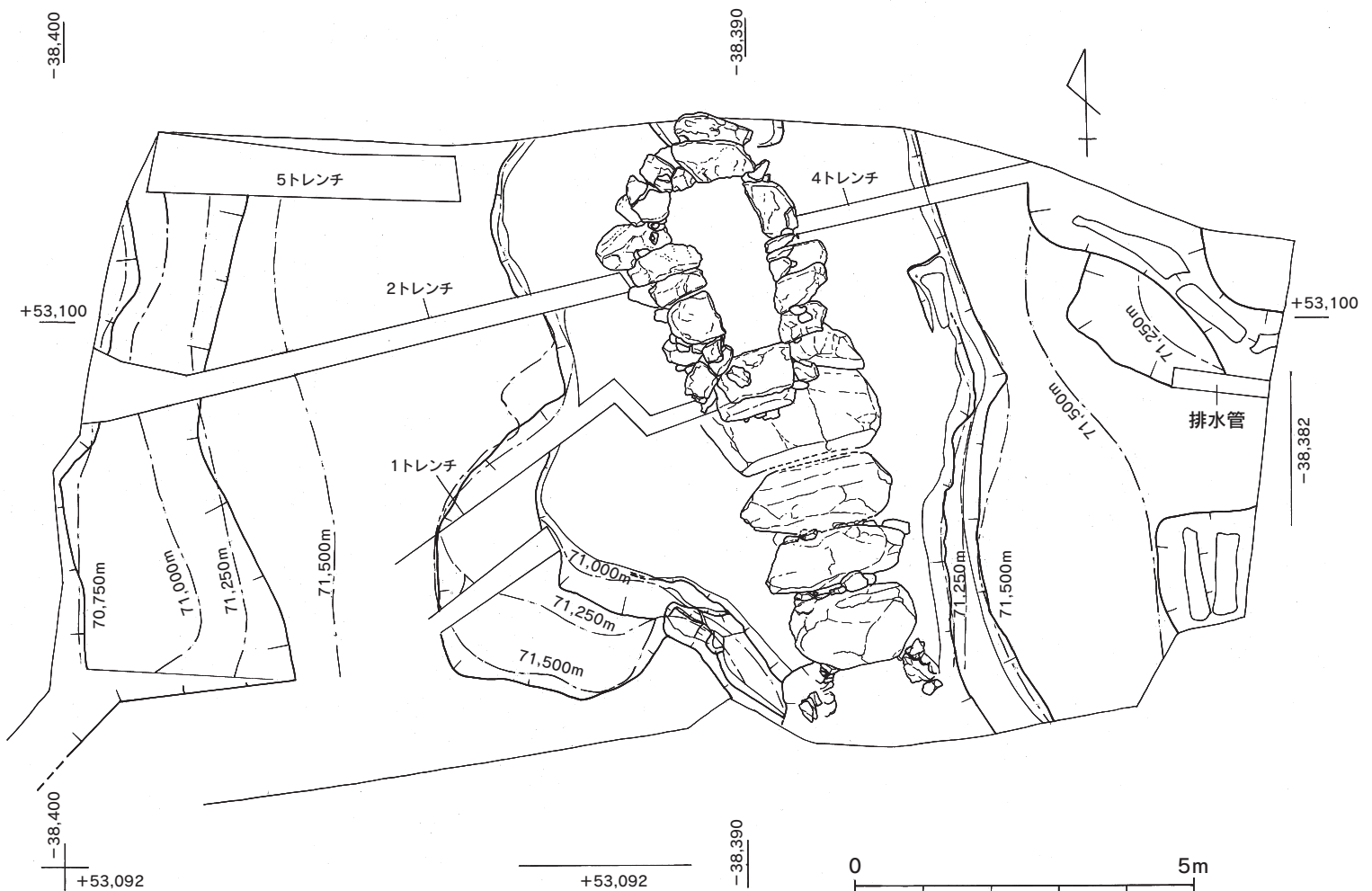


Fig.11 地山整形図 (S=1/100)

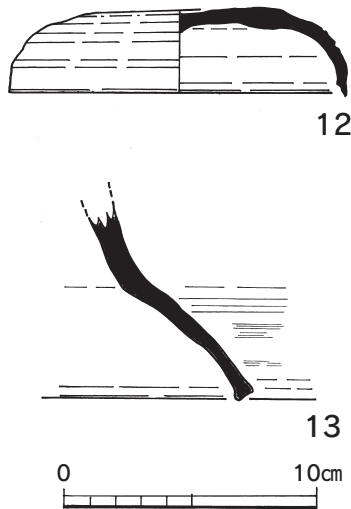


Fig.12 閉塞部出土遺物実測図
(S=1/3)

閉塞部出土遺物 (Fig.12) 12は赤焼きの須恵器の坏蓋。口径13.5cm、器高3.4cmを測る。焼成は良好で外面の体部に自然釉がかかる。調整は内外面ともにヨコナデを施す。外天井部はヘラ切り後ヘラ削りしている。口径は大きく器高は低い特徴がある。時期は小田氏編年のIIB期に該当。13は須恵器器台の裾部片。残存器高8cmを測る。内外共に灰色 (N6/) を呈し、焼成は良好で内外面に自然釉がかかる。外面の脚部近くにカキ目が施される。19と同個体かとも考えたが19にはカキ目がないことから別個体として扱った。12・13いずれも追葬時に玄室内から掻き出されたものであろう。

墓道 (Fig.8) 調査対象地内では、僅か0.5m前後の範囲しか検出できなかった。しかし墓道は隣地九電敷地内に確実に伸びていて推定墓道上に陥没したような地形変換線が確認できる。これは標高71mと69.5mの2箇所位置するが、羨門からの距離を測ると墓道の終息部は標高71mの陥没穴付近と推測される。しかしこの位置を想定しても墓道は長さ約5m前後となり、非常に長い墓道を持つ古墳だと考えられる。

表—1 出土土器観察表

法量の () は推定値・復元値を示す。

Fig.番号	器 種	法 量 (cm)			手 法 の 特 徴	備考：A. 色調 B. 胎土 C. 焼成 D. 残存状況 E. その他
		口径	低径	器高		
Fig 7-2	甕 (弥生土器)			4.30	器表磨耗	A. 外面にふい橙色(2.5YR6/4)・浅黄褐色(10YR8/4)・内面にふい橙色(2.5YR6/4)・にふい赤褐色(10R6/4) B. 細砂粒と2mm程度の砂粒を多量、カクセン石を含む。 C. 普通 D. 口縁部
Fig 9-6	壺 (須恵器)			11.80	外面胴部上～中位ヨコナデ、下位ヘラケズリ 内面上～中位ヨコナデ、下位ナデ	A. 外面灰白色(5Y7/1)・(5Y7/2)、内面灰色(N6/) B. 細砂粒と2mm程度の砂粒を少量、カクセン石・ウンモを含む。 C. 良好 D. 胴部の1/4 E. ロウ口回転右、胴部上位に自然釉
Fig 9-7	壺 (須恵器)			9.80	外面胴部中～下位ケズリ 胴部上位ヨコナデ、中位ナデ 内面ヨコナデ	A. 外面灰白色(5Y7/2)、内面灰色(N6/) B. 細砂粒と2mm程度の砂粒を少量含む。 C. 良好 D. 胴部1/8 E. ロウ口回転右 外面胴部上位に自然釉
Fig 9-8	高坏 (弥生土器)	(31.6)		6.00	外面体部ハケ目 内面体部ハケ目後ミガキ	A. 外面にふい橙色(7.5YR7/4)・にふい黄褐色(10YR6/3)・内面褐色(5YR6/6)・にふい橙色(7.5YR6/4) B. 細砂粒と3mm程度の砂粒とウンモ・長石・石英を含む。 C. 良好 D. 口縁1/4
Fig 9-9	高坏 (土器)			8.40	受部ナデ 内面ナデ シボリ痕	A. 外面灰白色(2.5Y8/2)・内面浅黄褐色(10YR8/4)・にふい黄褐色(10YR7/3) B. 細砂粒と2mm程度の砂粒を含む。 C. 普通 D. 胴部上半の1/2
Fig 9-10	壺 (弥生土器)	(19.9)		15.20	外面口縁部ハケ目、頸部ハケ目後ヨコナデ 内面口縁部ヨコナデ、指頭痕	A. 内外面に浅黄褐色(7.5YR8/4) B. 細砂粒と3mm程度の砂粒多量、赤褐色粒・カクセン石・ウンモを含む。 C. 普通 D. 口縁部1/2弱
Fig 9-11	甕 (土器)			9.70	外面胴部タタキ後ハケ目 内面ヘラケズリ	A. 外面にふい黄褐色(10YR7/3)・褐色(10YR5/1)・内面浅黄褐色(10YR8/4)・褐色(10YR5/1) B. 黄砂粒と1mm程度の砂粒・ウンモ・赤褐色粒を含む。 C. 良好 D. 胴部1/3 E. 外面に煤付着
Fig 12-12	蓋 (須恵器赤焼)	13.5		3.40	内外面に共にヨコナデ 外面天井部ヘラ切離し後ヘラケズリ	A. 外面にふい赤褐色(7.5YR5/3)・褐色(5YR6/1)・内面灰赤色(7.5R5/2) B. 細砂粒と2mm程度の砂粒を多量に含む。 C. 良好 D. ほぼ球形 E. ロウ口回転右 外面に自然釉
Fig 12-13	器台 (須恵器)			8.00	外面脚部力キ目、裾部ヨコナデ	A. 外面灰色(N6/)・内面灰色(N6/)・オリーブ灰色(5GY6/1) B. 細砂粒と3mm程度の砂粒を多量に含む。 C. 良好 D. 裾部から脚部の下 E. ロウ口回転左 外面に自然釉
Fig 14-14	平瓶 (須恵器)			9.00	外底面ヘラ切り後ナデ 外面胴部下位回転ヘラケズリ 胴部中位～頸部ヨコナデ後ナデ 内面ヨコナデ	A. 外面灰色(10Y6/1)・黄灰色(5B6/1)・内面黄灰色(5B6/1) B. 細砂粒3mm程度の砂粒と長石を含む。 C. 良好 D. 胴部下半から底部までの1/2弱 E. ロウ口回転左 外底面に自然釉
Fig 14-15	坏身 (土器)	(12.2)		4.05	外底面回転ヘラケズリ 内面ヨコナデ後ナデ	A. 外面灰白色(5Y7/2)・灰色(N5/)・内面灰色(N6/)・灰白色(5Y7/2) B. 細砂粒・長石を含む。 C. 良好 D. 2/5 E. ロウ口回転左
Fig 14-16	高坏 (土器)		(裾部) 11.0	5.10	外面裾部ヨコナデ、脚部ケズリ 内面ヘラケズリ	A. 内外面に浅黄褐色(10YR8/4)・褐色(5YR7/6) B. 細砂粒を少量とウンモ・赤褐色粒を含む。 C. 良好 D. 1/10 E. 外面赤彩、裾部に黒斑
Fig 14-17	壺 (弥生土器)		(11.0)	4.00	内面ナデ 指頭痕 外面器表磨耗	A. 外面浅黄褐色(10YR8/4)・褐色(2.5YR7/6)・内面浅黄褐色(10YR8/4)・にふい黄褐色(10R7/4) B. 細砂粒と2mm程度の砂粒とカクセン石・ウンモを含む。 C. 良好 D. 底部から胴部1/4
Fig 14-18	壺 (弥生土器)	(7.8)		3.40	内外面に共に器表磨耗	A. 内外面に共に褐色(7.5YR7/6)・浅黄褐色(10YR8/4) B. 細砂粒と2mm程度の砂粒を少量とカクセン石を含む。 C. 良好 D. 口縁部から胴部1/6 E. ミニチュア
Fig 14-19	器台 (須恵器)		(17.1)	5.15	内外面に共にヨコナデ	A. 内外面に共に灰色(N6/)・オリーブ灰色(5GY6/1) B. 細砂粒と4mm程度の砂粒を多量に含む。 C. 良好 D. 裾部から脚部1/3弱 E. ロウ口回転左 内外面に自然釉
Fig 14-20	甕 (弥生土器)		(9.2)	5.40	内外面に共に器表磨耗	A. 外面浅黄褐色(10YR8/4)・褐色(5YR7/6)・内面浅黄褐色(10YR8/4)・褐色(7.5YR7/6) B. 細砂粒と3mm程度の砂粒多量とカクセン石を含む。 C. 良好 D. 底部1/4



閉塞石



閉塞部付近天井



右側壁



左側壁

墓道部土層 (Fig.13) 調査対象地内では、僅かの範囲しか検出できなかったが今後のために作図できるものはできうる限り行った。しかし敷地境界部で作成したこの土層図は墓道部に対し直交したラインではないのと境界が直線でないためにやや変則的な図面のため石室センターや土層壁面の折れについては図中に示した。また層序中で変化があるラインについてはA・B・Cを表記した。

古墳構築当初の墓道は東側壁から窺える。墓道の上場のレベルは標高71.3mを示す。ここは羨門の基礎事業の範囲に含まれていたと思われる。底面近くの断面形はU字状を呈すが、東側壁は一旦斜めに立ち上がるが標高70m前後からやや直に近く立ち上がり始める。その高さは0.3m程で、この上部で幅0.3m程度の緩やかな段を形成し、さらにこの段から再び直に近く立ち上がり上場へと延びる。西側壁は段を形成する事なく斜めに標高70.7mの高さまで立ち上がるが、これより上部の立ち上がりは追葬時の掘削により確認できなくなっている。

Aは追葬時の掘削下場ラインと考えられる。追葬時の墓道の壁には当初の墓道壁のように段などはなく立ち上がる。断面形は緩やかなU字状を呈し、下場幅1m前後を測る。西側Aラインに沿った14・15層から当初の埋葬後にも盗掘にあったことが窺える。

Bラインが追葬後の盗掘時の下場と推測できる。この下場の中心は石室の中心線にほぼ一致している。下場幅は0.3mと狭いが上面の拡がりを見る限りでは作業はできるのであろう。下場近くにある19層が羨道天井石とほぼ同レベルにあたる。この高さからしても盗掘穴底面は十分に閉塞石にまで到達している事になる。

当初墓道掘削時の地山

当初墓道掘削時の地山

1. にぶい黄褐色土(10YR6/3)
2. にぶい黄褐色土(10YR6/3)、1層がやや赤色化したもの。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/3)、1層よりやや暗い。
4. にぶい黄褐色土(10YR6/3)、2層に似る。地山の橙色土(5YR6/6)が塊状に混じる。
5. にぶい黄褐色土(10YR6/4)、白色系砂が塊状に混じる。
6. にぶい黄褐色土(10YR5/3)、黒色土(10YR1.7/1)粒が均一に混じる。
7. にぶい黄褐色土(10YR6/4)、5層よりさらに白色系砂塊が多い。
8. にぶい黄褐色土(10YR6/4)、5層に似る。
9. にぶい黄褐色土(10YR5/3)砂質土。
10. 灰黄褐色土(10YR5/2)、にぶい黄褐色土(10YR6/4)の粒が均一に混じる。
11. にぶい黄色(2.5Y6/3)粘質土。
12. にぶい黄色(2.5Y6/3)粘質土、11層に似る。
13. 明黄褐色土(10YR6/6)に橙色土(5YR6/6)が塊状に混じる。
14. にぶい黄褐色土(10YR6/4)7層に似る。白色系砂塊が多い。
15. 灰黄褐色土(10YR5/2)砂質土、10層に似る。
16. 混合土(黒褐色土(10YR3/1)ベースに、にぶい黄褐色土(10YR7/4))塊が混じり。
17. 混合土(にぶい黄色土(2.5Y6/3)ベースに、明黄褐色土(10YR6/6)粘質土)に小礫、Feの痕が残る。
18. にぶい黄色(2.5Y6/3)粘質土をベース、砂が均一に混じり、しまりは良い。
19. にぶい黄色(2.5Y6/3)、粘質土、11層に似る。
20. にぶい黄色(5YR6/4)をベースに、にぶい黄褐色土(10YR7/3)砂質土を均一に含む。
21. にぶい黄褐色土(10YR6/4)
22. にぶい黄褐色土(10YR5/3)ベースに、にぶい橙色土(5YR6/4)を含む。20層に似る。
23. 明黄褐色土(10YR7/6)精良。
24. にぶい黄褐色土(10YR6/4)
25. 混合土(にぶい黄褐色土810YR6/4)+地山(塊)。
26. にぶい黄褐色土(10YR6/3)
27. にぶい黄褐色土(10YR6/4)、白色系砂塊を少し含む。
28. にぶい黄褐色土(10YR6/4)、遺物を含んでやや汚い。
29. 25層(混合土)に似る。
30. 29層(混合土)と同一か?
31. にぶい黄褐色土(10YR6/4)ベース、28層に似る。
32. にぶい黄褐色土(10YR5/3)砂質土。
33. 明黄褐色土(10YR6/6)13層に似る。
34. 明黄褐色土(10YR6/6)にぶい黄褐色土(10YR7/4)塊を多く含む。
35. にぶい黄褐色土(10YR5/3)砂質土。
36. にぶい黄褐色土(10YR5/4)砂質土、遺物(弥生土器片)を含む。

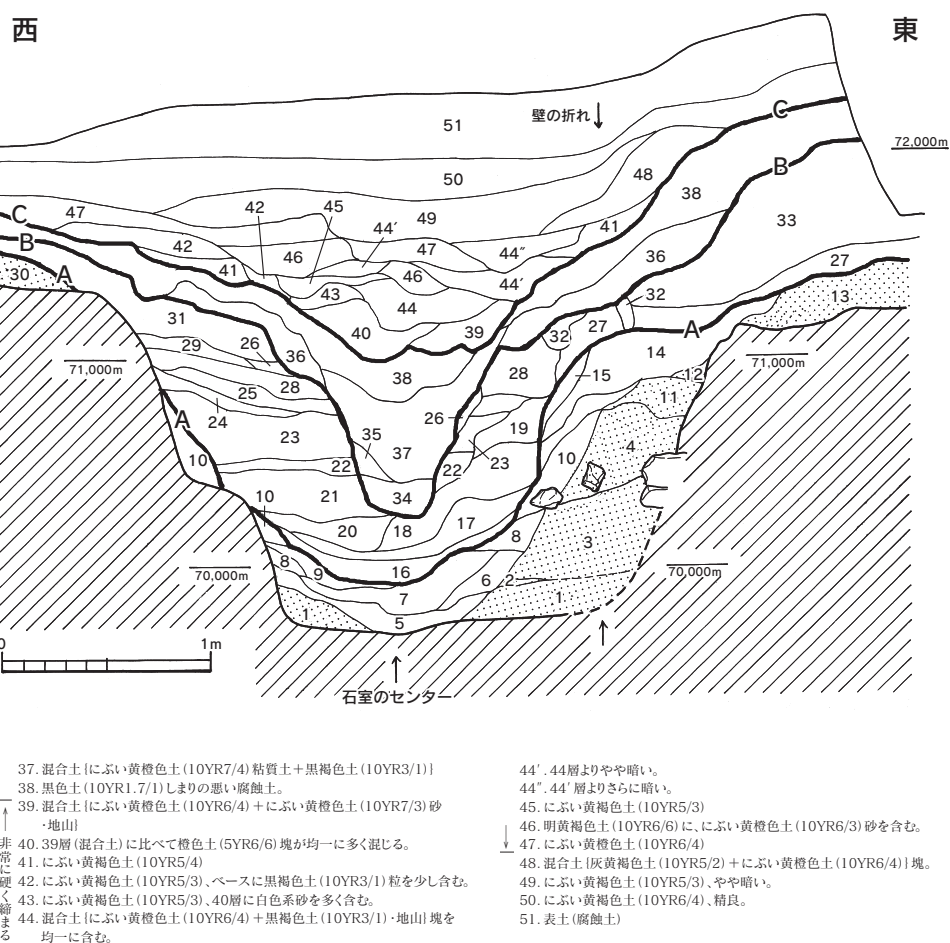


Fig.13 墓道部土層実測図 (S=1/40)

次にCラインは盗掘後の墓道の状態を示していて、中心付近の陥没状況が確認できる状況にあった事を窺わせる。その後、土地境界沿に里道が設けられた時に埋められて平坦になったと考えられる。39～47層までは、非常に硬く締まった状態であった。里道となってからも盗掘しようとしたのか49層の下ラインに掘削痕跡が見られるが少し掘り込んだだけで中止している。但し49・50層は監視哨の積み土と同じ土である。この事から49層下の掘削の時期は①は里道が設置された後②は監視哨構築とほぼ同時期の二通りが考えられる。

出土遺物 (Fig.14) 調査対象地内の墓道部は狭い範囲であったため出土した遺物は少なく、盗掘もしくは追葬時に掻き出された遺物だけでも知れない。14は平瓶の胴部片。残存高9.0cm、器面調整の内面はヨコナデ、外面の胴部上位はヘラケズリ、中位はヨコナデ後ナデ、下位は回転ヘラ削りで外底面はヘラ切り後ナデがなされる。15のⅢA期の須恵器坏身は復元口径12.2cm、器高4.05cmを測る。調整は内外面ともにヨコナデ、底面はヘラ切り後ナデで仕上げて、胎土には細砂粒・長石を含むが焼成は良好である。16は土師器高坏の脚部片。内外面ともに浅黄橙色 (10YR8/4) を呈し、焼成は良好。内面にはシボリ痕が顕著である。弥生壺の底部片の17は器表の磨耗が著しい。復元底径11cmを測る。18は復元口径7.8cm、残存高3.4cmを測る弥生のミニチュア甕。19は須恵器器台もしくは脚付壺の裾および脚部片で、器面の調整は内外面ともにヨコナデで仕上げている。焼成は良好で内外面に自然釉がかかる。復元裾径17.1cm、残存高5.15cmとなる。20は弥生の甕の底部。焼成は良好だが、内外面の器表磨耗が著しく、器面の調整は不明である。21は土師器の小皿。器高1.1cm、外底面に板状圧痕が残る。次に出土した鉄器は鉄鏃が11点、刀子1点、飾金具1点、馬具点のみで、農工具にあたるものは出土していない。

鉄鏃は22～31・35ですべて完形品ではない。22は鏃身で広根式に属し篋被から張り出した関をもち残存長4.8cmを測る。23・24は鏃身に差異はあるが形態は尖根式に属す。篋被部から張り出した小さな関をもつ。23の残存長4.5cm、24の残存長は7.3cmを測り、いずれも茎を失う。24・25・27～31・35はいずれも鏃身を失い、茎部のみが出土した。28・30は鏃身に近い部分で関があった事を窺わせる。32は馬具で衛に連結する部分の環状鉄器で両端に環をもつと思われるが一方の環は明確にならなかった。33は飾金具で長さ5cm、幅2cmの長方形の形状をなし二つの孔をもつ。34は刀子の基部片。残存長4cm、背幅0.5cm、刃幅1.2cmを測る。

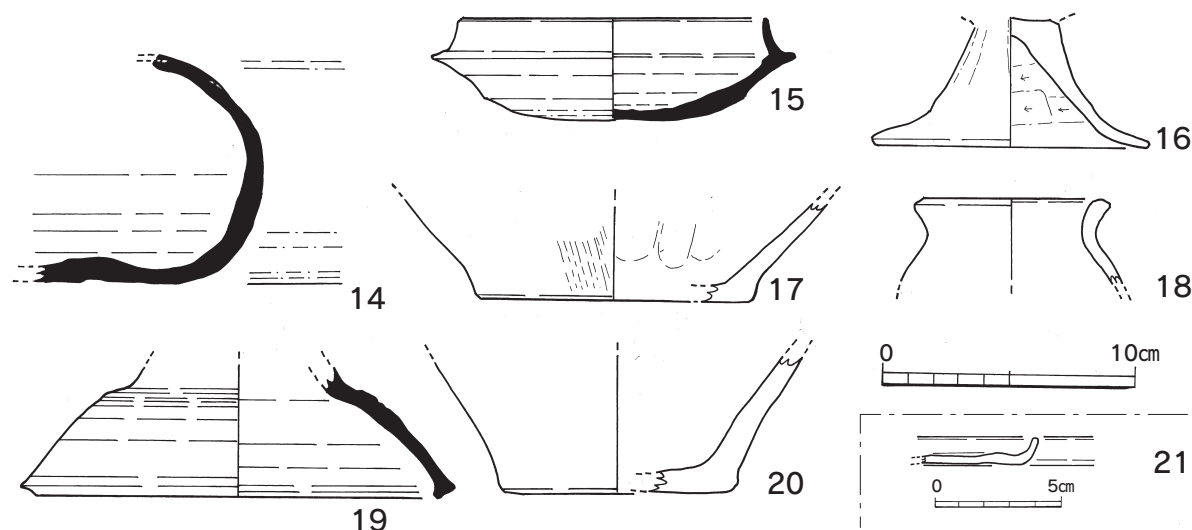


Fig.14 墓道出土遺物実測図 (S=1/3)

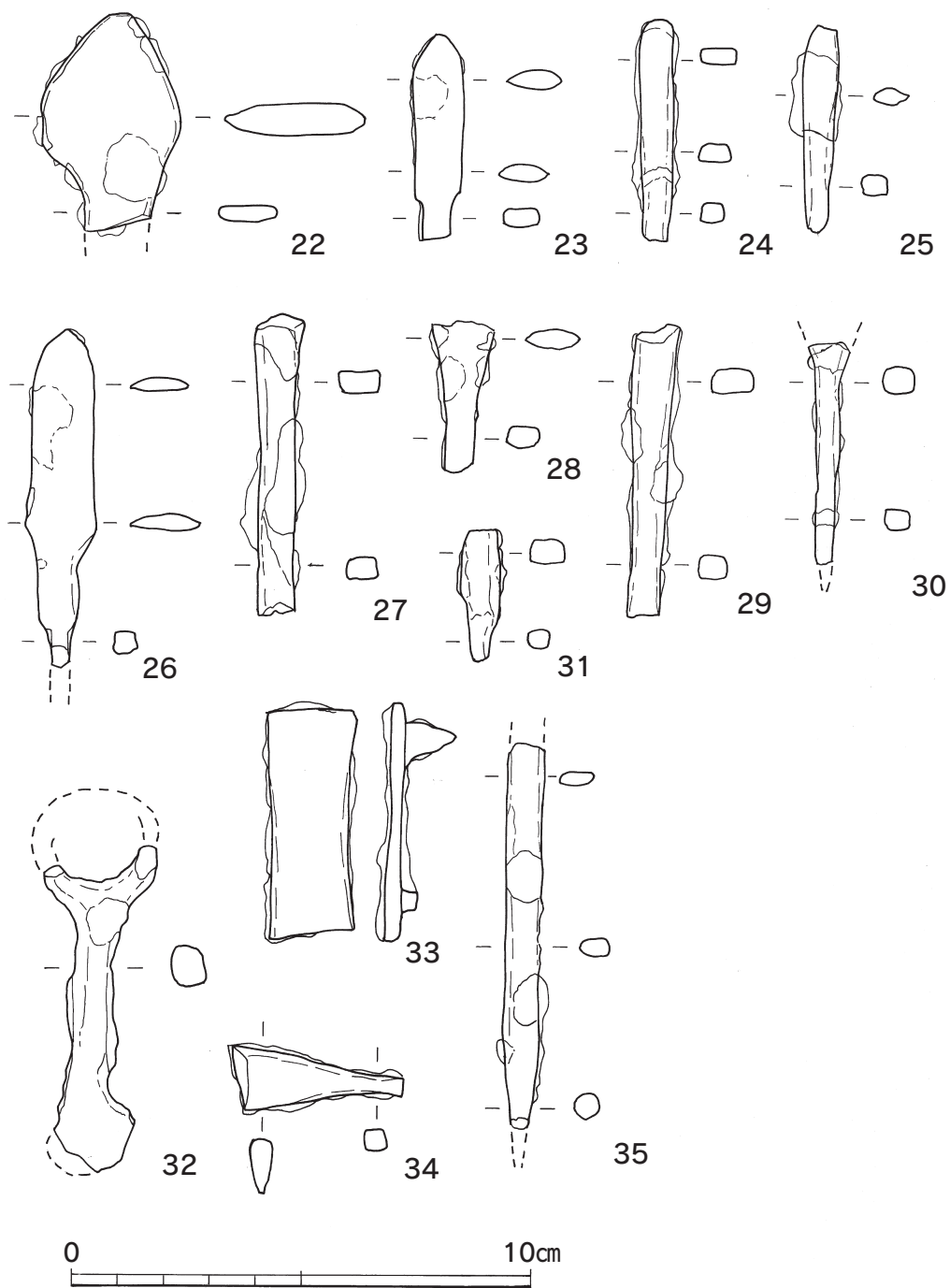


Fig.15 出土鉄器実測図 (S=2/3)



Fig.14-14



Fig.14-15



Fig.14-16



Fig.14-19



Fig.12-12



Fig.12-13



Fig.7-4



Fig.7-5



Fig.7-3



Fig.15-32



Fig.15-33



Fig.15-22



Fig.15-23



Fig.15-24



Fig.15-26



Fig.15-27



Fig.15-30



Fig.15-34



Fig.15-25



Fig.15-28



Fig.15-31



Fig.15-29



Fig.15-35

4. まとめ

今回の調査では新たに確認できた遺構である聴音防空監視哨跡と1基の古墳であり、周辺地域における歴史的位置や背景を述べるには周辺の調査事例や資料不足は否めない。ここでは遺構についての補足と問題点などをあげておきたい。

聴音防空監視哨跡 この監視哨跡は地元でもまったく存在は知られてなかった。北側丘陵部の池田山には通信所があったと聞くが明確な位置や施設については現在でも確認はできていない。昭和20年頃になると山家には第16方面軍司令部が配置され周辺は重要な場所と位置付けられる。他県等の監視哨の記録や資料を参考にすると監視哨の近くには哨舎が配置される。長道遺跡で可能性のある哨舎設置場所は西側斜面の平坦な場所が可能性として十分考えられる。しかしこの平坦面は伐採時に荒らされていたため調査対象としなかった。また他の監視哨の記録を参考にすれば、監視哨員は、哨長・副哨長・数名の哨員で組織され数班体制が日夜交代で勤務していたと思われるが、長道遺跡については記録がまったくなく推測の域はでていない。

長道1号墳 市域に所在するが砥上岳山麓に多く点在する古墳群のひとつに含まれる。残念ながら古墳の所在した丘陵は、こま切れ状態の開発により既に原形を留めていない。このため1号墳の墳丘形状・規模に関しても全面的な詳細は明確にできなかった。玄室内からは敷石は勿論、遺物の一片すら出土しなかった。墳丘裾表採や閉塞部や墓道から出土したものは陶器MT85型式やⅡB・ⅢA期（小田富士雄氏編年）にあたる。また墓道部周辺や表土中にはⅥ期（小田氏編年）の細片も出土している。これらの遺物が玄室内から直接の出土でなく追葬時の掻き出しである事や出土遺物の絶対量も極めて少ないことを考慮しつつ、古墳築造時期を考えると6世紀中頃もしくは6世紀前葉と推測できる。またⅥ期まで追葬が行われた可能性もある。古墳そのものに注目すると長道1号墳は石室全体がほぼスッポリと掘方に収まる形態をなす。同様な形態の調査事例の多くは宗像市や福津市（旧福岡市・津屋崎町）に集中して所在し、大なり小なり胸形君一族との関わりを示すものとして捉えられている。現段階では宗像市や福津市を除く他市町村では殆ど確認されていないが、唯一の調査事例として藤坂Ⅱ-1号墳（筑前町）を上げる事ができる。この古墳は斜面に盛土をし、後に掘方を掘削して石室構築を行うが、やはり石室自体が掘方にほぼスッポリ収まる形態をとる。築造時期も長道1号墳とほぼ同時期で盟主的な古墳として報告されている。また藤坂Ⅱ-1号墳は長道1号墳とは近距離にあつて、砥上岳山麓の古墳群の一つでもある。これら2基の古墳が胸形君一族との関連を示すと仮定すると近距離に古墳が所在する位置関係の意味は深い。しかも古墳築造の時期は6世紀前葉から中頃であり、磐井の乱前後の長道1号墳や藤坂Ⅱ-1号墳周辺の環境にも興味を持たれる。次に2基の古墳の占地場所についてもやはり興味深い。長道1号墳は冷水越の道沿い、藤坂Ⅱ-1号墳も砥上岳山麓の豊前に通じる道沿いで、2基の古墳の占地は重要な位置にあると言えよう。時代は後出するが8世紀代に胸形君一族の人物が御笠郡の大領に任命されている記述がある。このことも含め胸形君一族と御笠郡および長道1号墳周辺部や砥上岳山麓とは6世紀前葉から確実に関連があったと推測しておきたい。この2基の古墳で推測するのは資料不足や根拠に欠けるとの御批判はあろうが、周辺特に山麓道沿いでこのような事例が増える事を期待したい。

なお末尾になりましたが、(株)埋蔵文化財サポートシステム佐賀本社の城野一郎氏には聴音防空監視哨関連で多大な資料提供および御教示賜りました事を深く感謝申し上げます。

報告書抄録

ふりがな		ながみちいせき						
書名		長道遺跡						
副書名								
巻次								
シリーズ名		筑紫野市文化財調査報告書						
シリーズ番号		第87集						
編集者名		渡邊和子						
編集機関		筑紫野市教育委員会（教育部・文化財課 文化財担当）						
所在地		〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1 TEL.092-923-1111(代)						
発行年月日		西暦2006年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながみちいせき 長道遺跡	福岡県 筑紫野市大字 山家	176	361	33° 28' 41"	131° 24' 47"	2000.11.10 ～ 2001.1.15	192㎡	土取り
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
長道遺跡	古墳 防空監視哨	弥生 古墳 近代		古墳 防空監視哨		弥生土器 土師器 須恵器 鉄石 石器		

長 道 遺 跡

筑紫野市文化財調査報告書

第 87 集

平成18年3月31日

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会
〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1-1-1
TEL 092-923-1111(代)
FAX 092-923-9644

印 刷 信 光 社 印 刷 (有)
福岡県朝倉市一本32-1